
月曜日の午後に

猿芝居

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月曜日の午後

【Nコード】

N2847S

【作者名】

猿芝居

【あらすじ】

いつもの帰り道、でも今日は少し違った。少年はその日、世界から消えた。転生した世界で少年は何を思うのか、そして元の世界に帰ることは出来るのか。

R15タグがついていますが、そういった内容の話は、かなり後になると思われます

第一話「月曜日の帰り道」

「今日はタマゴが安いな」

一人、チラシ片手に路地裏を歩く

「親子丼にでもするか」

それは絶望への道、しかし彼は気付かない。

自分がこの世の死を迎えようとしていることに

「明日は火曜日だな」

その言葉を最後に、彼は、この世から、消えた

目を覚ますと、辺りが白い光に包まれている。俺以外、何も無い、真っ白な空間

「……ここは、どこだ？」

今日は俺が食事当番だ。早く帰って作らないとあいつに怒られる

「卵買わなきゃ……」

親子丼はあいつの大好物だ。小さい頃からずっと

「君は死んだ」

不意に背後から聞こえた声に振り返る。そこには一般的にイケメンと呼ばれる類に属する青年が立っていた

「死んだ・・・？」

「正確には外傷や病による死ではない。私が死ねと念じたために死を迎えた」

なんだこいつ、電波さんか？そんなのに付き合っている暇はないんだが

「今は理解しなくていい。君はこれから、勇者としての使命を果たす事となる、それ相応の力は与えよう。だが、どう道を切り開くかは君次第だ。がんばってくれ」

急激な眠気が俺を襲う。薄れていく意識の中、青年が呟いた

「すまない」

「・・・い・・・すか・・・」

なんだ？ 眠い。意識がはっきりしない、だれかが俺の体を揺すって話しかけているようだが良く聞き取れない

すう〜と息を吸い込むような音。そして耳元で轟音が響く

「だいじょうぶですかあああああああ!!??」

痛みとも表せるその声に、俺は跳ね起きる

「よかつた〜生きてた〜・・・」

俺の横では先程の叫び声の主であろう少女が、安堵の表情で胸を撫で下ろしていた

「・・・ここは・・・?」

まだ痛む耳を押さえ、辺りを見渡す、そこは木に囲まれた小さな広場の様な場所で、俺は広場の草の上に倒れていたようだ

「ここはリグルの森ですよ。あなたが倒れていたので死んでるかと思っただけ・・・なぜこんな所にいたんです?」

「リグル・・・そんな所、東京にあったか?」

「トウキョウ?・・・もしかして記憶がないのですか?」

何言ってるんだ、記憶ならしっかりしている。卵を買おうとスーパーに向かっていて、そうしたら・・・そうしたら・・・どうした?・・・そうだ。だれかに謝られて・・・だれかってだれだ?だめだ思い出せない

頭を抱えて呻いている俺を心配してか、少女は自然と上目づかいに俺の顔を覗き込む

「大丈夫ですか？」

「ああ・・・少し記憶が困惑してるみたいだ。すまないが今日がいつだか教えてもらえるか？」

まずは状況把握だ。ここがどこだかも分からないし、まず日本なのか？この子、銀色の髪をしているし・・・でも日本語で話している。あーもう訳が分からない

「今日ですか？今日は、7月6日の水曜日ですよ？」

・・・ああ、どうなってんだ

第一話「月曜日の帰り道」(後書き)

評価、感想などいただけるとうれしいです

第二話「領主の息子」

ここに来て3日が経つ、今日までで集めた情報から、俺は一つの仮定を立てた。それは、

異世界に来てしまった。ということ

俺の元居た世界と、この世界は根本的に違うところが3つある

1、この世界には魔法が在る
2、モンスターと呼ばれる化け物。さらにその親玉に、邪神というものが存在する

3、強さが絶対で、世界を七騎士と呼ばれる7人の最強の戦士たちが治めているということ

なぜ異世界に来てしまったかは分からない。これが夢であってほしい、と何度も願ったが、この悪夢が覚めることはこの3日間、一度もなかった

「はぁ・・・」

こちらに来てから何百回目かの溜息をつく

「そろそろ元気出してよ、ハヤト。こつちまで滅入ってきちゃうじやない」

彼女はヒナカ。俺をリグル森から町まで連れて行ってくれた人で、歳は俺と同じ18歳、銀色の髪と、大きな瞳が特徴の美少女だ。

「ほら、ハヤト。ご飯出来たから冷めないうちに食べて」

ハヤト。それが俺の名、元の世界では名字があつたが、この世界では名字は貴族しか名乗れないらしい、だから俺もハヤト、とだけ名乗っている

現在、俺はヒナカの家に泊めてもらっている。親はもういないし、一人暮らしただから、とヒナカに言われ、半ば無理やりだったがお世話になることにした

「ありがとう」

俺は一言お礼を言い、緑色のハーブがまぶされたスープをすする

「おいしい？」

「ああ、おいしい。いつもすまないな」

ヒナカは心底嬉しそうに笑うと、おじいちゃんみたい。と言って鼻歌を歌いながら階段を降りて行った

これは蛇足だが、ヒナカはそこのアイドルなんかより、よっぽどかわいい。口に出して言ったことはないが、それは事実だ。故に町でヒナカは有名人で、俺が彼女の家に入りに入っていることが広まっております、俺が外に出ると、男達から殺すような眼つきで見られるのである

「いずれここから出ないと俺の身が危ないな・・・」

働き口でも探してみるか。ハローワークとかあるのかな

・・・？何やら下の階が騒がしい、お茶でも零したか？ゆっくりと階段を降りて行くと、俺の目に映ったのは、数人の男に囲まれたヒ

ナカの姿だった

「ヒナカツ!!」

思わず階段を4、5段飛び越し、ヒナカのもとへ駆け寄る

「ハヤト!!」

男達の前に立ちはだかつた俺は背中の中のほうにヒナカを隠す。ヒナカも俺の服を後ろからギュツと掴み、背中から覗き込むように顔を出す

「だれだ？貴様。なぜヒナカの家から出てきた？ヒナカ！こいつは何者だ！」

偉そうにしゃべる目の前の優男は、不機嫌そうに眉を吊り上げ、ヒナカを怒鳴りつけた

「この人は・・・私の旦那です！ですから、もうここには来ないてください!!」

ヒナカの言葉に、俺はもちろん、男達も目を丸くする

「ねっ、ハヤト？」

ヒナカが不安そうに俺を見つめる。一瞬でヒナカの意思を察した俺は男達に向かって言い放った

「どなたかは知らないが、うちの嫁に手を出さないでいただきたい。お引き取り願います」

それを聞いたリーダー格の優男は、驚愕の目を俺に向けた後、一度、チツと舌打ちをして帰って行った。それを見届け、レイナは緊張の糸が切れたように、その場に脱力した

「ふう〜・・・怖かったあ・・・ありがとう、ハヤト」

座り込んだまま、ヒナカは安心したような笑顔を向ける

「いや、大したことじゃない。大丈夫か？というかあいつらはだれだ？」

「あれは、ゲルドー二男爵の息子さんのハーバート。とそのお付きの人達」

「ゲルドー二？」

「うん。この町の領主」

それって・・・やばくね？

「けっこう・・・まずかったかな？あはは・・・」

自分のした事に、焦りと不安が出てきた。しかしヒナカはそんなことない、と首を横に振った

「いいや、大丈夫だよ。いつもの事だし、ありがとう。ハヤト」

いつも・・・？

「それよりハヤト・・・あの、さっきのね・・・だ、旦那っていうのは、

その・・・」

顔を赤くし、俯き加減になりながら話すヒナカ

「ああ、分かってるよ。あの場を流す為の嘘だろ？本気になんてしないよ」

そんなヒナカの気持ちを悟って言ったつもりだったが

「あ・・・う、うん・・・」

なぜかヒナカがしょんぼりしているように見えた

第二話「領主の息子」(後書き)

評価、感想などいただけるとうれしいです

第三話「盗賊の襲撃」

「……………暇だ」

今、ヒナカは領主のゲルドー二男爵に呼ばれて、男爵の屋敷に出かけている。俺も町に出てふらついていてもいいのだが、一週間前の領主の息子がやってきた事件以来、俺とヒナカが結婚しているという噂が広まり、ろくに出かけることができないのだ（町の男に殺されるから）

「……………なんで、こんなとこにいるんだろうな」

もう、こつちの世界に来てからずいぶん経つ。あいつは元気だろうか

キヤアアアアアアアアアア！！

外で女性の悲鳴が上がる

「なんだ？」

二階の窓から、そつと外を覗くと、そこには、おぞましい光景が広がっていた。ナイフや銃を持ち、同じ恰好をした男たちが、町民たちを襲っていた

「……………っ!?!」

思わず、窓から離れ、身を隠す。盗賊？

ガチャ、と下の階から扉の開く音がする。マズイ、家の中に入って

来たようだ。下品な男達の声が聞こえる。俺はゆっくりと音をたてないようにして、階段を降りる。

俺は多少、武道の心得がある。喧嘩は負けたことがない、一般人になら負ける理由はないが、この世界は違う、魔法がある、魔法相手に生身で勝てるとは思えない。・・・だがこのままヒナカの家が荒らされるのを黙って見ているわけにもいかない

「3人か・・・」

小声で人数を確認し、深呼吸をして、呼吸を整え、俺は階段の下にいた男に向かって飛び降りた

「ぐつ！！・・・あ・・・」

飛び降りた勢いを利用し、男の首筋に刺すような蹴りを入れる。男は小さな悲鳴を上げ、その場で気絶した

「だれだ！！」

前方に居た男二人が、振り返り、銃を向けてくる。しかし、俺の姿はもうそこには無く、二人の懐近くまで忍び込み、右手を引いて構えた。俺は走ったきた勢いを殺さず、右側にいた男にそのままボディーブローをかます

「あ、っ！！・・・う・・・」

「て、てめえ・・・！！」

最後に残った男が、銃を構えなおし、発砲するが、俺の動きを捉えることはできない。そのまま俺は壁を蹴り、その反動を利用して、

男の鳩尾に回し蹴りを叩きこむ

「ぐはっ……」

3人が気絶している事を確認し、体の力を抜く、おそらく半日は起きることはないだろう、そういう攻撃をしたから、

「ふう……魔法使いじゃなかったか……」

「体が鈍ってるな、しばらく運動してなかったし……って、そんなことより!!」

無事、男達を倒せたことに安堵するが、俺の頭に別の不安がよぎる

「……ヒナカ!!」

第三話「盗賊の襲撃」(後書き)

評価、感想などいただけるとうれしいです

第四話「人殺しになった日」

「・・・はあ・・・はあ・・・」

俺は走っていた。領主の家に向かったヒナカの無事を確認するために。

途中何度か、盗賊にも襲われたが、幸運にも、魔法が使える者には出くわさなかった

「・・・ヒナカ。」

こんなことなら、町人の視線なんか気にせずに町の事を把握しておけばよかったと後悔する・・・領主の家が分からない！！よって現在、当てもなく町中を疾走中

「つたく・・・なんでこんなことに・・・」

案内板とかねえのかよ！！ちつともそれらしき建物が見つからない、次第に募る焦りと不安に大声をあげそうになるが、それはなんとか噛み殺す

いやあああああああ！！

遠くから響く女性の声、これは

「ヒナカ！？」

一軒家を1つ挟んで、さっきいた所とは反対側の道にやってきた。そこにはほかの家よりも一回り大きく、表札には「ゲルドーニ」と

書かれている家があった。領主の家だ

「ヒナカ！！大丈夫か！！」

乱暴に扉を開け、部屋に飛び込んだ。

「・・・！？」

ヒナカが襲われていた。しかしそれは盗賊の恰好をした者にはなく、貴族のように、上品な服装をした大柄の男だった。男は白眼を剥き、口元からはだらしなくよだれが垂れている。明らかに正常な状態ではない

「・・・ハヤト！？」

俺の存在に気付いたヒナカ、しかし、そのことで足元にあった壊れた椅子の残骸に躓き、倒れてしまう。そこに向かって男は、手に持っていた斧を頭上高くに持ち上げ
そして、振り下ろした

手を伸ばす

でも、届かない。そこで俺は自分の無力さを痛感する
俺は、大切なものを、人を、守ることもできないのか

力が・・・欲しい

瞬間、俺の手から、何かが弾けた。目には見えないその何かは、男
目がけ一直線に飛んでゆき、男の頭を、吹き飛ばした

「……………え……？」

俺は小さく呻くと、びちゃびちゃと血が飛び散る男の首と、自分の
手とを交互に見た

どうやったかは分からない。ただ、自分が殺したということだけは
分かった

「ハヤ……………ト……………」

それはヒナカも同じようだった

血が飛び散った髪を垂らしながら、俺にふらふらと歩み寄る

「今……………魔法を……………」

言葉が出ない。俺が人を殺してしまった。唇を噛みしめ、俺は俯く。
すると、扉の方から声が響いた

「……………貴様がやったのか？」

領主の息子、ハーバートだった

「……………貴様がやったのかと聞いている」

その表情はうつすらと笑みを浮かべ、父親を殺した者へ向ける目で
はなかった。むしろ、その行為を称えるような、そんな目。

返事をせず、ただ項垂れている俺に向かってハーバートは言う

「……そいつを捕獲しろ」

「待ってください!!」

ヒナカが叫んだ

「領主様が精神支配系の魔法使いに操られて……それでハヤトが私を助けようとして……それで……」

俺を庇い、ヒナカは弁解の言葉を述べようとするが、俺はそんな彼女を、右手で制す

「……いいんだ。ヒナカ、俺が、殺した。」

人を殺してしまった。それは事実だ、さっきの力もよく分からないが、もう俺はヒナカに合わせる顔がない

「……だ、そうだ。……連れて行け」

俺は両脇を抱えられ、連れて行かれた。

「……ハヤト……。」

最後に声を掛けてきたヒナカと、目を合わせられないまま

第四話「人殺しになった日」(後書き)

評価、感想などいただけるとうれしいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2847s/>

月曜日の午後

2011年10月8日18時06分発行